

デザインの力で「よりよい社会」を

Frontier 先端を走る

UDや地域活性化に取り組む

崇城大芸術学部デザイン学科教授

本間 康夫 さん(63)

崇城大芸術学部デザイン学科の本間康夫教授(63)は「ユニバーサルデザイン(UD)」から「地域デザイン」まで、デザインの力でよりよい社会を目指す。「人を幸せにする仕事。想いと、思いやりをカタチに」。研究に心優しい情熱をそそぐ。(福井一基)

ユーザーの視点 常に意識

■UDをテーマにさまざまな製品の開発に取り組んでいます。

デザイナーの仕事は社会の中にある問題を発見し、解決すること。社会で大きな問題を背負っているのは、子どもや高齢者、障害者などの弱者です。弱者が住みよいならば、健常者も住みよいはず。常にユーザーの視点を意識しています。

2011年度のグッドデザイン賞に選ばれた歩行補助器「Kappo」は、半身まひの方に会った際に考えました。地面を足で蹴って進む4輪自転車です。半身まひでも外出が楽で、足腰が弱った高齢者の有酸素運動やリハビリにも適しています。転倒しにくい安全性と、福祉用具には見えないデザインに腐心しました。

■子どもにかかわるデザインではどんな工夫をしましたか。

10年度のキッズデザイン受賞作「ベジマルキッズ!」は、子どもが食べ物をこぼさず、残さず食べる工夫を重ねた食器

です。子どもをよく観察すると、大きくて底の深いマグカップなど、食器が口や手の大きさに合っていなかった。食べ残したり、こぼしたりするのは「デザインのせい」だったんです。

そこで、コップを楕円にしてお口を当てる部分をとがらせ、高さは子どもの拳に合わせました。底にキャラクターの「ベジマル」を描いたのは、出会うために完食してもらう算段です。食器の持ち方が悪い子ども、きれいに食べてくれました。高齢者も使いやすく、年間数万個売れています。

■デザインを通じた地域活性化も手掛けています。

竹や和傘の明かりが夜を彩る山鹿市の「山鹿灯笼浪漫・百華百彩」は今年で13回を数えました。僕の方針は「ないものねだりはしない」。そこで明治・大正時代、山鹿市が一大産地だった和傘に目を付けたんです。歴史を掘り起こし、そ

の土地にあるものに磨きをかける。それが地域のアイデンティティーにもなると思っています。今年は初めて地元高校の美術部が参加し、やっと地域の祭りになった感があります。

市営温泉さくら湯の復元にも協議会長として携わりました。地元の人が誇り、自慢できるものを作る。そして、そこに住む人が幸せになる。それがデザインです。

■デザインは単に「図案」というわけではないのです。

以前はデザイナーといえば「図案家」という位置付けだった。戦後は車も家電製品も外国にお手本があり、まねすればよかったんです。色や形を決める「お化粧係」の時代が長く続きました。

ところが、高度成長を遂げた日本には、追い掛けるものがなくなっていた。そこでは「何をなすべきか」が大事になる。「モノ」から「コト」へと時代が変わったんです。

見た目の良しあしで商品を選ぶ要素

グッドデザイン賞に選ばれた「Kappo」と厚紙で作った山鹿灯笼を手にする崇城大の本間康夫教授
＝熊本市西区



は、小さくなっています。それを持つことで人生がどう変わり、いかに豊かに過ごせるかが問われる時代になりました。スマートフォンも機能性重視ですよ。

世の中の仕組みを変え、よりよくするデザインを私たちは「大文字のデザイン」と呼びます。それは社会学であり、経済学であり、哲学でもある。その意味では総理大臣なんて、トップデザイナーでないといけません。

◇ほんま・やすお 1952年、山口県宇部市生まれ。宇部高、九州芸術工科大(現九州大)大学院博士課程単位取得退学。東海楽器製造(浜松市)に10年間勤務し、楽器のデザインを手掛ける。2000年、崇城大芸術学部の開設と同時に着任。会社員時代の本間教授がデザインしたギターは、有名ロックバンドのリードギターが使用しているという。

編集後記

デザインなんて縁遠い世界だと思っていましたが、私たちを取り巻くさまざまなモノやサービスが全て「デザイン」されていて、それなしでは世の中が成り立たないことに今回、気が付かされました。

特に本間先生のデザインは「配慮」とも言い換えられるでしょう。さまざまな人が「生きやすい」社会は、そんなデザインの力に支えられているんですね。逆に不便さも、発想と情熱次第で改善できるということでしょう。

他者の視点に立って考える大切さを学びました。

(福井一基)